京都の天文学【4】　説話文学の星

臼井　正（京都学園大学）

1. 左大臣・藤原仲平と大将星

『今昔物語集』をはじめとする平安時代の説話文学には、星をテーマにした話がいくつか出てきますので、今回はそれらを紹介しましょう。

『今昔物語集』[1]は平安時代末期に成立したとされる説話集で、作者は分かっていません。インド・中国・日本の説話が集められ、各話は原則として「今は昔」という書き出しで始められています。その巻第二十には、次のような話があります（同じ話は『宇治拾遺物語』にもあります）。

朱雀天皇の御世である天慶(938－947)の頃に、天文博士が「月が大将の星を犯したので、左・右大将は重く慎むべきである。」と報告しました（「犯」とは月と惑星または恒星が 7 寸（約 0.7 度）以内に接近することで、凶兆と考えられていました）。このとき右大将だった藤原実頼（さねより）は、この報告を受けて春日大社や興福寺などでお祈りをしました。一方、この時の左大将は、枇杷（びわ）左大臣と呼ばれた藤原仲平（なかひら）で、右大将の叔父にあたる人でした。この左大将の祈祷師だった東大寺の法蔵僧都は、右大将がお祈りしているのを聞いて、自分の所にも左大将から依頼が来ると思って待っていました。しかし、何の連絡もないので不審に思い、京に上って左大将に会いに行きました。

法蔵僧都は左大将に会って、やって来た理由を話すと、左大将は「このように来てくれたのはうれしいが、もし自分が右大将に負けないようにお祈りをすると、右大将に悪いことが降りかかるかも知れない。右大将は賢くて年も若く、これからも長く天皇にお仕えすべき人だ。しかし私は年老いて、学才も大したことはないので、死んでも構わないと思って、お祈りをしないのだ。」と言いました。これを聞いた法蔵僧都は、涙を流して、「これは百千万のお祈りに優ることだ。御仏もきっと加護してくださるだろう。ですから、お祈りをなされなくても、恐れることはないでしょう。」と言っ

て、帰って行きました。左大将はその後も、病気になることもなく、七十歳になるまで大臣の地位にありました。

ここに出てくる「大将の星」は、陰陽道で金星を大将軍と呼ぶことから、金星のことだと考えられていますが、黄道付近には右大将星と呼ばれていた星（しし座シグマ星：左大将星もありますが黄道から離れているので月が接近することはありません）もありますので、断定は難しいと思います。また、藤原忠平（左大将の弟、右大将・藤原実頼の父）の日記である『貞信公記』の天慶二年十二月十五日にある「左丞相（左大将・仲平)、陣外に参入し、…天変により慎み給うべきの状…」という記事との関連が指摘されていますが、天変の正体については分かっていません。

2.　仰ぎ中納言の話

同じ『今昔物語集』の巻二十六にも、大将星にまつわる話があります。

中納言・藤原忠輔（ただすけ）という人が右中弁という位にあった時のことです。左大将・藤原済時（なりとき）という人が参内したときに、彼に会いました。忠輔が空を仰いでいるのを見て、左大将は戯れに「今、天ではどんな事が起きていますか。」と聞きました。忠輔はこのように言われて、少しむっとして、「今、天には大将を犯す星が現われています。」と答えました。左大将はひどいことを言われたと思いましたが、冗談だと思って腹も立てずに苦笑しただけで、その場は終わりました。

しかし、その後いくらも経たないうちに、左大将は亡くなってしまいました。そこで、忠輔は、あの冗談のせいかも知れない、と思ったのでした。忠輔は、その後、中納言まで出世しましたが、世の人はずっと「仰ぎ中納言」と呼んで、笑っていたということです。

「仰ぎ中納言」と呼ばれた藤原忠輔は藤原氏でも傍系でしたが、左大将・藤原済時の方は、左大臣・藤原師尹（もろだだ）の次男（藤原道長の従兄弟）でしたが、長徳元（995）年の天然痘の大流行により亡くなっています。この話もどこまで本当か分かりませんが、自分で星を見るような貴族がいたとしても、星がきれいだから、ではなく、やはり星占いが目的でした。また、「大将を犯す星」という表現からは、大将（星）は恒星で、そこに惑星が接近した、と読めますが、あくまでも説話文学なのであまり詮索しても意味が無いでしょう。

3. 安倍時親と北斗七星

同じく『今昔物語集』巻十二には、奈良の興福寺が焼けて再建したときの次のような話があります。

興福寺は永承元(1046)年に焼失してしまいましたが、二年後に再建されました。その時に供養が行われることになり、当時の藤原氏の当主である頼通（道長の子）をはじめとする公卿が参列しました。この日の寅の時（午前 3〜5 時ころ）に仏像を金堂にお移しする予定でしたが、雨が降りそうな天気で空が暗く、星が見えないので、時刻を知ることが出来ませんでした。陰陽師・安倍時親（晴明の孫）もいましたが、「曇って星が見えないなら、何を頼りに時間を測ればいいのだろう。どうしようもない。」と言っていたところ、風も吹かない空に、寺の上の雲が四、五丈だけ晴れて、北斗七星が明るく見えました。これによって、今が寅二つ（午前 3 時半ころ）と分かって、喜んで仏像をお移ししました。星が見えた後、空はたちまち元のように曇ってしまいました。

この話は、興福寺の再建時に起きた奇跡の一つとして書かれています。ただし、興福寺側の再建記録である『造興福寺記』には、儀式終了に及んで、「（天）気、将（まさ）に晴れんとす。雨脚ようやく止む」とあるのみで、儀式の途中に雲が切れて星が見えた、という記述は無いそうです。

古代中国の暦には月建（げっけん）と呼ばれるものがあって、これは各月の夕方に、北斗七星のひしゃくの部分がどの方向を向いているかを、その十二支の方位として表わしたものです。例えば、正月はひしゃくが寅の方向を向いているので建寅月（けんいんげつ）とも呼ばれます。同じ原理で、ある日の時刻も分かるので、こうした知識を持っていた誰かが、この話を創作したのかも知れません。

4. 『江談抄（こうだんしょう）』と熒惑（けいわく：火星）

『江談抄』[2]は平安時代後期の学者・大江匡房（まさふさ）の談話を、藤原実兼（さねかね）が筆記したもので、その中に熒惑に関する話が 2 つあります。

陰陽道をおさめた僧侶である慶増（きょうぞう：実際には宿曜師でした）が匡房のところにやって来て言いました。「世間の人は、あなたを熒惑の精と申しています。そこで、私は閻魔庁に訴えたいことがあるので、あなた

に会いに来たのです。」 この事を聞いてから自分でも格別の人間かと思うのです。中国では唐の太宗の時に熒惑の精が燕と趙の間の山に降ったということです。李淳風という人が熒惑の精が降ったと報告したので、太宗は人を派遣して見に行かせると、白頭の翁がいたということでした。また、李淳風自身も熒惑の精だったと言われています。こういう精というものが、何にでもあるのです。このように匡房は語りました。

匡房は菅原道真と比較されるほどの学才の持ち主で、百人一首にも彼の歌が選ばれている程ですので、よほど自信があったのでしょう。平安時代に書かれた聖徳太子の伝説集『聖徳太子伝暦』でも、熒惑が人となって降りてきて童子の間で遊び、好んで歌を作って未来のことを歌う、ということが書かれています。又、この話の後半に登場する李淳風は唐の天文学者ですが、北斗七星の精が地上に降りてきて、長安の市で酒を大量に飲んでいたところ、李淳風に見破られて姿を消した、という話がありますので、これが変形して『江談抄』の話になったのかも知れません。

もう1つの話にも熒惑が登場します。

藤原到忠（むねただ）は天暦年間（947－956）には蔵人でした。天皇が天文博士・賀茂保憲を召して仰せられることがあれば、到忠が使者となって往復していましたので、天文の事をほぼ知るようになりました。後に、ある人と厠で天文の事を話していた時に突然、到忠に矢を射る者があり、矢は柱に当たりました。到忠は驚いて、「もっともなことだ。厠で天文の話をしたので、熒惑星が私を射たのだ。今年は木星の助けがあったので、私に命中せずに柱に当たったのだ。」と言ったということです。

このように星を神の姿ととらえるのは、密教や道教の考え方です。

5. 仮名暦をあつらえた話

『今昔物語集』と並ぶ説話集に、『宇治拾遺物語』[3]があります。『宇治拾遺物語』は『今昔物語集』より後の13世紀前半に成立したとされますが、こちらも作者は分かっていません。その巻五には、仮名暦（かなごよみ：女性や漢字が読めない人のために仮名で書かれた暦）に関する話があります。陰陽寮で作られた具注暦（ぐちゅうれき）が漢字で書かれていたのに対して、主に仮名を使った仮名暦が平安時代後期から作られるようになって、庶民に普及していきました。

ある人の所に年若い新参の女房がいました。彼女は紙をもらって、近くにいた若い僧に仮名暦を書いて欲しいと頼みました。僧は「お安い御用だ。」と言って、最初はきちんと、「神、仏によし」や「坎日（かんにち；陰陽道で万事に凶とされる日）」や「凶会日（くえにち：同様に凶とされる日）」などと記していきましたが、だんだんといい加減になって、ある日には「物食わぬ日」、別の日には「これこれがあればよく食う日」などと書いていきました。女房は変な暦だとは思いましたが、何かわけがあるのだろうと思って、そのまま暦に従っていました。ある日、暦に「はこすべからず（大便をするな）」とあったので、どうしようと思いましたが我慢しました。しかし、それから毎日「はこすべからず」とあったので、二三日は我慢しましたが、とうとう耐え切れずに、左右の手で尻をおさえて「どうしよう。どうしよう。」と身もだえしているうちに、意識が朦朧として、思わず漏らしてしまいました。

藤原道長の祖父の師輔（もろすけ：1.で紹介した右大将・実頼の弟）が子孫に宛てて書いた「九条殿遺誡（ゆいかい）」には、まず起きたら、属星（陰陽道で自分の生まれ年に当たる星で、北斗七星の内の一つの星）の名前を七回唱えなさい、次に鏡を取って顔を見て、暦を見て日の吉凶を知りなさい、丑の日に手の爪を切って寅の日に足の爪を切りなさい、などとあって、更には入浴の日の吉兆まで書かれています。当時の人がこれほど暦に縛られていたことから、この笑い話も生まれたのでしょう。

これらの説話からは星を美しいものとして鑑賞するという意識は見られませんが、当時の人々は、悪いことの前兆としてであったり、時刻を知る手段として、または神の化身として天文に関心を持っていました。その結果、これだけバラエティに富んだ星や暦にまつわる説話が作られたのです。

参考文献

[1] 山田孝雄ほか校注、1975-1977、『今昔物語集』、日本古典文学大系 22～26、岩波書店
[2] 江談抄研究会・編、1978、『古本系 江談抄注解』、武蔵野書院
[3] 小林智昭ほか校注・訳、1984-1986、『宇治拾遺物語』、日本の古典 40～41、小学館